

## 多良間島、下地島初記録となる維管束植物 2 種と 現状不明だった維管束植物 3 種の再発見の報告

砂川栄喜・砂川吉江

〒906-0007, 宮古テレビ株式会社, 沖縄県宮古島市平良字東仲宗根 968-9

〒906-0012, J Aおきなわ宮古地区営農センターさとうきび対策室 沖縄県宮古島市平良字西里 1440-1

### はじめに

佐藤・城間・阿部・横田 (2020) によると、リュウキュウタラノキ (ウラジロメダラ) *Aralia ryukyuensis* は宮古島に記録があるものの現状は不明である。また、シマトネリコ (タイワンシオジ、タイワントネリコ) *Fraxinus griffithii* C. B. Clarke は宮古島でのみ記録されている。今回、リュウキュウタラノキを下地島で初記録したほか、シマトネリコを多良間島で初記録した。このほか、佐藤ら (2020) に記録があり、宮古島での現状が不明だったササキカズラ *Ryssopterys timoriensis* (DC.) A. Juss、カレンコウアミシダ *Tectaria simonsii* (Bedd.) Ching を宮古島で再確認したほか、伊良部島での現状が不明だったリュウキュウタイゲキ (リュウキュウダイゲキ) *Chamaesyce liukuensis* (Hayata.) H. Hara を伊良部島で再確認したので報告する。

### 方法

調査は、2022 年 4 月から 2024 年 11 月まで実施した。宮古諸島全域を定期的に巡回し、分布や植生、特定植物群落などの調査を実施した。リュウキュウタイゲキについては、2016 年 10 月に 1 株を確認後、2022 年から 2023 年まで時期的消長を観察、2024 年は 3 月

から 11 月までコドラート法で同じく時期的消長を調査した。

### 結果

リュウキュウタラノキ (ウラジロメダラ)。

採集標本. MCM-N2-24021、下地島、2024 年 10 月 5 日、砂川栄喜採集。

茎の上部に短い刺が疎らにあった。葉は 2 ~ 3 回の羽状複葉で、小葉は先端が尖る楕円形、長さは 6.1 ~ 9.7 ㎝だった。縁には低い鋸歯があった。裏面は灰白色でほぼ無毛。花は頂生し、花弁は白色で長さ約 4 ~ 5 ミリ。

2024 年 3 月に下地島の農道沿いで、1 ㎡から 2.5 ㎡ほどに成長した数株の本種を発見した (図 A の 1)。発見時には、成長した株の周囲に、高さ 10 ㎝から 20 ㎝ほどの幼木が 20 本ほどあった。定期的に道路清掃が行われる場所で、清掃後、成長した株の一部は伐採され、幼木もほぼなくなった。10 月 20 日に 1 株の開花を確認した (図 A の 2)。

本種が確認されたのはリュウキュウマツの植栽林だった。近年は林内の下草刈りなどの管理作業は行われておらず、ギンゴウカン (ギンネム) *Leucaena leucocephala* (Lam.) de Wit、テリハボク *Calophyllum inophyllum* L.、オオバギ *Macaranga tanarius* (L.) Muell.

Arg.、オオムラサキシキブ *Callicarpa japonica* var. *luxurians*、オキナワトベラ (リュウキュウトベラ) *Pittosporum boninense* koidz. var. *lutchuense* (koidz.) H. Ohba、テリハクサトベラ *Scaevola taccada* (Gaertn) Roxb.、ハリツルマサキ *Maytenus diversifolia* (Maxim.) Ding Hou などが生えていた。

初島 (1975) に宮古島に分布することが記載され、佐藤ら (2020) も宮古島での分布を記載している。宮古島市が市史編纂のため2012年10月から2017年2月にかけて実施した調査では確認されず、現状は不明だった。

2009年頃には、ごく一部の地域住民によって自生していることが知られ、春の高級食材として珍重されたようであるが、これまで標本に基づく報告はない。下地島は標本に基づく新産地となり、国内の自生地への南限となる。採集標本は宮古島市総合博物館に収蔵されている。

シマトネリコ (台湾ンシオジ、台湾ントネリコ)。

採集標本. MCM-N2-24022、多良間島塩川、2024年10月17日、砂川吉江採集。

葉は表面に光沢のある濃い緑色をした革質で奇数羽状複葉。小葉は、先端が鋭く尖る楕円形で、長さは5.5~11.5㎝。対生し葉脈が目立つ。樹皮は灰色味の強い褐色。

2024年8月24日に多良間島字塩川の集落から離れた農道沿いで1株を確認した (図Bの1)。本種は公共施設や民家庭などへの植栽木として人気が高い常緑高木だが、多良間島内で本種が植栽されている公共施設や民家は見当たらず、生えている場所から自然分布

の可能性が高い。

本種が確認されたのは、ギンゴウカンが優占した雑木林の道路沿いだった (図Bの2)。テリハボクの防風林に隣接し、ソテツ *Cycas revoluta*、ハチジョウススキ *Miscanthus condensatus* Hack、クワズイモ *Alocasia odorum* などが生えていた。確認されたのは高さ2.5mほどの若木だった。確認場所は不定期に道路清掃が行われており、枝の一部は切除されていた。

佐藤 (2020) が宮古島での新分布を記載している。多良間島は、標本に基づく新産地となる。採集標本は宮古島市総合博物館に収蔵されている。なお、筆者のこれまでの調査で、宮古島では、宮古空港近くの圃場に植栽木があるほか、下地上地で街路樹としての植栽が確認されている。

ササキカズラ。

本種は、「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」 (種の保存法) で国内希少野生動植物種に指定されているため、写真記録のみとした。

常緑のツル性本木で、3~5mほど成長する。葉は長さ5~15㎝ほどの円心形で先端は尖る。全縁。厚質で対生する。葉柄は3㎝ほどで、上部に腺体 (図Cの1) がある。葉の表はやや艶のある緑色で、ほぼ無毛。葉腋から伸びた花軸の先に、6~7花をつける。花は2㎝ほどで黄色。

2024年8月7日に宮古島北部の低地で、極少数を確認した (図Cの2)。発見場所はギンゴウカンが優占しており、アカテツ *Planchonella obovata*、ゲッキツ *Murraya paniculata*、コウトウヤマヒハツ (シマヤマ

ヒハツ) *Antidesma pentandrum*、オオバギ *Macaranga tanarius* (L.) Muell. Arg.、ギョクシンカ *Tarenna gracilipes* (Hayata) Ohwi、ガジュマル *Ficus microcarpa* L.f.、タブノキ *Machilus thunbergii* Siebold et Zucc.などが生えていた。8月10日に開花を確認した(図Cの3)。開花は11月中旬まで続いた。開花のピークは10月上旬だった。

初島(1975)に宮古島に分布することが記載され、佐藤ら(2020)も宮古島での分布を記載している。宮古島市が市史編纂のために2012年10月から2017年2月にかけて実施した調査では確認されず、現状は不明だった。

本種は、環境省のレッドリストで絶滅危惧ⅠA、沖縄県のレッドデータブックで絶滅危惧Ⅱ類に指定されている。また、種の保存法で国内希少野生動植物に指定されているほか、宮古島市自然環境保全条例で保全種に指定されている。

リュウキュウタイゲキ(リュウキュウダイゲキ)。

採集標本、MCM-N2-24023、伊良部島、2024年10月5日、砂川栄喜採集。

地上部は枯れ、直根が発達した根系だけで越冬、越夏する多年草。全株ほぼ無毛で鋸歯はほとんどない。茎は斜上しながら地を這い、分枝する(図Dの1)。葉は長さ8cmほどの楕円形で対生する。近縁種のハイニシキソウに比べ、根は主根が肥大する(図Dの2)。発芽から開花までの期間は短く、葉を8~10枚展開した時点で花を咲かせる。

本種が生育していたのは、風衝性の植物群落が広がる断崖上部だった。同所的にミツバコマツナギ *Indigofera trifoliata* やソナレ

ムグラ *Leptopetalum strigulosum* (Dc.) Neupane et N. Wikstr. var. *parvifolium* (Hook. et Am.) T.C.が見られ、付近にはイソマツ *Limonium wrightii* (Hance) Kuntze var. *arbusculum* (Maxim.) H. Hara、ハマエノコロ *Setaria viridis*、コウシュンシバ *Zoysia matrella* (L.) Merr.、シオカゼテンツキ *Fimbristylis cymose* R. Br.、グンバイヒルガオ *Ipomoea pes-caprae*などが生えていた。また、テリハクサトベラ *Scaevola taccada* (Gaertn) Roxb.が群落を形成していた。

2016年10月に1株を確認後、2022年から2023年まで時期的消長を観察、2024年は3月から11月までコドラート法で調査を行った(図Dの3)。24年の調査では、前年までの観察状況を踏まえ、本種が有意に発芽していた場所を調査地点に選定した。選定場所は、海岸線から10mほど離れた場所①、海岸線から50mほど離れた場所②の2か所。2週間に1回、日曜日に植物種や本種の消長を調査した。

この結果、調査地点②では、3月24日に3株の発芽を確認後、6月2日に26株でピークを迎えた。コウシュンシバやハマエノコロ、ミツバコマツナギなどが見られ被度60%程となった。7月14日にはコウシュンシバやハマエノコロ、ミツバコマツナギなどの被度が90%程となり、本種は完全に消失した。その後の発生は見られなかった。調査地点①は②から70日遅れの6月3日に3株の発生を確認、6月16日に10株の発生が確認されピークを迎えた。その後、急激に消失したあと、9月8日~9月21日に6株となり、2回目のピークを迎えた。①では、ミツバコマツナギやソナレムグラ、コウシュンシバなどが生えたが、地表を覆いつくす事はなかった。

2022年から2023年の調査では、本種は春期に発生のピークを迎えたあと、7～8月にはほぼ消失、9月下旬に再び発生のピークを迎えた。24年の調査では①で同様の傾向を示したが、7～8月も調査地点以外では発生株が有意に見られた。これは、7月の降水量（下地島）が2022年は24.5<sup>mm</sup>、2023年は41.5<sup>mm</sup>だったのに対し、2024年は100<sup>mm</sup>だったことが影響している可能性がある。

本種は、初島・天野（1994）に宮古島に分布することが記載され、佐藤ら（2020）は宮古島、伊良部島での分布を記載している。沖縄県文化環境部（2018）は、2005年に伊良部島で少数個体が確認されているが最近では確認されておらず、宮古島では絶滅した恐れがあるとしている。川上（私信）は、1975年8月に宮古島北部で本種を1株確認し、1976年12月に絶滅確認としている。宮古島市が市史編纂のため2012年10月から2017年2月にかけて実施した調査では確認されず、現状は不明だった。沖縄県のレッドデータブックで絶滅危惧ⅠAに指定されているほか、宮古島市の自然環境保全条例で保全種に指定されている。採集標本は宮古島市総合博物館に収蔵されている。

#### カレンコウアミシダ

**採集標本. MCM-N2-24024、宮古島南東部、2024年10月22日、砂川栄喜採集。**

主に琉球石灰岩地の湿った場所に生える常緑のシダ。葉の長さは40<sup>cm</sup>から1<sup>m</sup>。葉は束生し羽状に切れ込む。葉柄と葉軸は光沢のある黒褐色または黒色で微毛がある。孢子嚢は円形で、羽片に不規則に散在する。

2024年8月24日に宮古島南東部で、少数

を確認した（図E）。生育していたのはドリーネで、日中でも直射日光が当たらない場所だった。周りには、オウゴンカズラ *Epipremnum aureum* が繁茂していた。

本種は、初島・天野（1994）に宮古島に分布することが記載され、佐藤ら（2020）は宮古島、伊良部島での分布を記載している。宮古島市が市史編纂のために実施した調査で、2012年に伊良部島の2か所で確認された（横田・阿部・佐藤、2016）。宮古島での現状は不明だった。

今回の確認で、宮古諸島での自生地は、伊良部島と宮古島を合わせ3か所となる。本種は沖縄県のレッドデータブックで絶滅危惧Ⅱ類に指定されている。

写真



図Aの1 リュウキュウタラノキ



図Aの2 リュウキュウタラノキの開花の様子



図Bの1 シマトネリコ



図Bの2 シマトネリコの生育環境



図Cの1 葉柄上部の腺体



図Cの2 樹幹を覆うササキカズラ



図Cの3 ササキカズラの花



図Dの1 リュウキュウタイゲキ



図Dの2 発達したリュウキュウタイゲキの直根



図Dの3 調査を行った1畝四方の区画



図E カレンコウアミシダ

### 謝辞

元高校教諭の川上勲氏、宮古島市史編さん室の佐藤宜子氏にはいろいろな事をご教示いただいたほか、種の同定に際しお世話になった。宮古島市総合博物館の湯屋秀捷氏には、標本の収蔵に関してご協力いただいた。宮古テレビの友利恵之氏には、通常では撮影が困難な高所からの撮影に際しご協力いただいた。多良間村在住の清村めぐみ氏には多良間村での植生調査に際しご協力いただいた。心より感謝申し上げます。

## 引用文献

- 初島住彦 (1975). 琉球植物誌 (追加・訂正). 沖縄生物教育研究会
- 初島住彦・天野鉄夫 (1994). 増補訂正 琉球植物目録. 沖縄生物学会
- 宮古島市史編さん委員会. 宮古島市史第三卷自然編 第 I 部みやこの自然 本編. 宮古島市教育委員会
- 佐藤宜子・城間恒宏・阿部篤志・横田昌嗣(2020). 宮古諸島維管束植物目録. 宮古島市史第三卷自然編 第 I 部みやこの自然 別冊. (編) 宮古島市史編さん委員会. 宮古島市教育委員会
- 島袋敬一 (1997). 琉球列島維管束植物集覧. 九州大学出版会
- 大川智史・林将之(2016). 琉球の樹木 奄美・沖縄一八重山の亜熱帯植物図鑑. 文一総合出版
- 片野田逸朗(2019). 琉球弧・植物図鑑. 南方新社
- 沖縄県文化環境部自然保護課(2018). 改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 第 3 版 (菌類編・植物編) レッドデータおきなわ. 沖縄県文化環境部自然保護課
- 横田昌嗣・阿部篤志・佐藤宜子(2016). 宮古諸島から新たに見つかった維管束植物. 宮古島市総合博物館紀要第 20 号
- 琉球の植物研究グループ(2018) 「琉球の植物」データベース. 国立科学博物館

